

一見すると安瀬英雄のセルフポートレート《RED》シリーズは典型的なセルフポートレートからはかけ離れている。タイトルにある赤の抽象的な揺らめく炎たちがそれぞれの端から端へと重なり合い、色調の均質さを壊しながら優雅に消えゆき、光の痕跡を残す。淡い黄色やピンク色を含んだ柔らかく落ち着いた赤の色調からオレンジ色、黄褐色、明るい茶色の色彩豊かなバリエーションへと広がっていく力強い真紅まで、彼の作品では色のすべてを網羅している。ポートレートを見ていくほどに、伝統的な具象表現からはかけ離れたものになっていく。

しかしセルフポートレートは以前から特殊な鏡としての機能を持ち、計算されたコントロールをもって個性を表現するという魅力的な力をアーティストたちにもたらしてきた。セルフポートレートは、多くの人々に対して同じ複雑な選択肢を与え、長い歴史の流れの中で芸術家たちを試すような存在だった。日常的になった腕をいっぱい伸ばしてスマートフォンで撮影するセルフィーは今、そんな長い間存在し続けてきたセルフポートレートというジャンルにおけるデジタルでの最新形である。しかしデジタルの画像イメージは今や単なる写真という枠を超えている — それは濃密かつ膨大に入り組んだデータの箱であり、そこに織り込まれた画像／データは、破壊的な新しいアプローチから21世紀のニュアンスを明らかにする作用を持つ。

安瀬英雄と彼の見事にほとぼしる赤に話を戻そう。この「ポートレート」は、実は彼の指を接写した画像であり、カメラレンズを指で覆い、その状態で得られる光を用いて撮影している。邪魔なカメラストラップが写り込んでしまうというような事ではなく、安瀬の指はミスではなく注意深くテーマとして選ばれた被写体であり、彼自身の完全なる意図の一部（または版）である。波打つ色の抽象表現のその一つ一つは精密な技術と数的な情報を伴う。GPSによる正確な彼の位置情報、シャッターが押された正確な時間、使用された携帯カメラのメーカーとモデル情報が情報として含まれ、それらがまとまった画像／データのパッケージがソーシャルメディアに一年間毎日アップロードされ、流れる時間の遂行的な要素をこのより大きな規模のプロジェクトに落とし込んでいる。

河原温の《I AM STILL ALIVE》の電報のように、日々アップロードされる安瀬の投稿は、繰り返される（そしてとても強烈な）自己宣言である。しかしこれらの写真は単に顔や、はっきりと認識できる体のパーツ — あまりに容易なこれらの特徴づけは、本作とほぼ関連性を持たないように思われる — を記録するという行為を超えている。その代わりに、安瀬のポートレートは彼自身を瞬間の中にある情報の濃密な集合体として写し、その集合体は偶発的に光を屈折させる（ピクセルというデジタルの配列になる）間接的な物理的存在であり、ここにいる彼の存在を表す統計的な証拠をもたらすデータ列の融合である。

ある意味で、安瀬は画像を純粋な記録としての情報の流れにまでそぎ落とすという彼自身の能力を試している。彼は大胆にも肖像画という視覚的言語から肖像を取り払っている — 彼の撮影する抽象的なスナップ写真（また、それらに伴う大量のデータ）はそれぞれ安瀬の生活における繊細な物語を見る者に伝えるが、表現や彼の顔に表れる表情の助けを借りることはない。彼の指から生まれる抽象表現は現代のダダの表現のようであり、これはセルフィーから発される個性への強い崇拜に対する破壊的な反応である。この《RED》で安瀬は、デジタル社会の現代における肖像を再定義し、シンボリックな化身を超え、肉体を持たずにネットワーク化された存在のパーツが何の問題もなく本人の代わりに肖像画の中に存在できる場へと昇華させている。彼の領域であるこの目を見張る赤を見ると、そのしなやかな色の移り変わりの形に気を取られてしまうかもしれないが、彼の写真は我々自身を定義づけるために用いた要素が静かに変化していることを示唆する。

ローリング・ノブラウ

Collectors Daily

編集長